松山市教育会情報

発行所　松山市教育会
松山市祝谷町1-5-33
☎ 089－933－0354
発行責任者　松田邦雄
編集　調査研究部

「後は頼む」「後は任せろ」

副会長
窪田一生

「子規さん俳句かるた」より
松山市教育委員会　編
松山市立子規記念博物館　監修

新しい年を迎え、子どもたちが1年のよいスタートが切れるように、そして進級・進学に向けてのよいバトンが渡せるように、微力ですが全力を尽くしてまいりたいと思います。

昨秋、就学児の保護者向けに「子育てについて」、大先輩の大内康夫先生にご講演いただきました。「子育てとは長い道のりを走り続け、決して途中で諦めてはならないもの。保護者はマラソンランナー、教師は駅伝ランナー。」と、聴く者の心を揺さぶるすばらしいお話でした。

毎年正月に、どちらかといえば暇つぶしで見ている恒例の箱根駅伝ですが、今年はこの「教師は駅伝ランナー」という言葉が、心の奥底に残ったまま見入ってしまいました。

今、幼保小中の連携の大切さが叫ばれていますが、かつて小学校の学担は2年間持ち上がるのが普通でした。2年で子供たちを育てるという使命感に燃えていたように思います。しかし今は、学担は1年毎に交代していくのが一般的です。園から受け継いだタスキは、小学校で6人、中学卒業まで9人の学担で「子どもたち一人一人の成長という大切なタスキ」として引き継がれていくのです。

お屠蘇気分で、何気なく見ている箱根駅伝が、毎年ドラマを生み、感動を呼ぶのはなぜでしょう？

まだ大学生の駅伝ランナーは、自分に託された区間を、母校のタスキをかけて必死の思いで走っていきます。当然各選手には様々な力量の差があり、たとえ多くの選手に抜かれても、力を緩める者は誰一人いません。足が痙攣を起こしても激しい腹痛に襲われても、歯を食いしばり、ふらふらになりながらも、「タスキをつなぐ」その一途の思いで走り抜きます。無情の繰り上げスタートとなっても、涙をこらえてタスキをつないでいきます。そして中継点の次走者が視野に入ると、さらに最後の力を振り絞ってペースを上げ、無事タスキを手渡した後、崩れるように倒れこんでいきます。それを仲間が、優しく温かい毛布で受け止めてあげるのです。

私たち教師は、次の学年や学校にタスキを渡す時、この様な思いで引き継いでいるでしょうか？

タスキを手渡す選手は、全力を出し切って倒れこみながら「すまん。後は頼む」と声を絞り出し、受け取る選手は、どんなに抜かれていても、どんなにタイムロスしても、「よくやった。後は任せろ」と叫びながら走り出していきます。そのロスしたタイムを取り戻そう、少しでもタイムを伸ばして「タスキをつなごう」と、それだけを考えて走り続けます。決して、前走者が遅かったから、抜かれたからなどと、言い訳も批判も、愚痴もこぼしません。

私たち教師は、タスキを受け取る時に「昨年までにこうしてくれていれば」、「前の学担が、この学年は、あの家庭が・・・」などと、言い訳や批判、愚痴をこぼしていないでしょうか？

教職という駅伝コースには、上り坂もあれば下り坂もあります。先の見えない曲がりくねった道もあります。強い向かい風が吹く時も、時には雪の山道を走らなければならない時もあるでしょう。

たとえ意に反しても、「それぞれ任された区間を、自分のもてる全力を出し切って、大切なタスキをつないでいくことが、私たち教師の使命」ではないでしょうか。

そして、「後は頼む」「後は任せろ」と、互いに声を掛け合えるプロの教師仲間でありたいと思います。

平成26年度 報賞者
松山市教育会

(福音支部)
沖原　功夫 先生
理　事

(雄郡支部)
松原　成子 先生
支部長

(高浜支部)
矢野　達郎 先生
支部長

(石井北支部)
長岡　芳朗 先生
副会長・支部長

(姫山支部)
井上　　篤 先生
支部長

(素鷲支部)
小田　哲志 先生
事務局長

(生石支部)
松浦　正壽 先生
事務局長

(双葉支部)
門屋　　浩 先生
事務局長

「えひめ教育の日」記念事業

「まつやま教育フォーラム26」高齢慶祝者（傘寿）名簿

	氏　名	支部		氏　名	支部
傘寿	渡部英綱　様	八坂	傘寿	仙波貴美子　様	久米
傘寿	竹田弘幸　様	東雲	傘寿	八木義則　様	小野
傘寿	三好桂子　様	新玉	傘寿	宮内育枝　様	小野
傘寿	佐々木幹男　様	清水	傘寿	高木栄子　様	小野
傘寿	橘　宏和　様	潮見	傘寿	橘　智恵子　様	石井
傘寿	遠藤三男　様	和気	傘寿	藤川典子　様	石井
傘寿	佐々木貞子　様	和気	傘寿	相原秋男　様	荏原
傘寿	布袋節子　様	和気	傘寿	渡部周作　様	荏原
傘寿	須賀重子　様	和気	傘寿	西川祥子　様	荏原
傘寿	村上庄次郎　様	三津浜	傘寿	中島敬一　様	たちばな
傘寿	久米冨夫　様	高浜	傘寿	大上千佳子　様	石井東
傘寿	大河内町子　様	高浜	傘寿	高橋綾子　様	石井東
傘寿	土居美智子　様	高浜	傘寿	今井秀明　様	味生第二
傘寿	山本美恵子　様	味生	傘寿	藤井田克美　様	味生第二
傘寿	増元晶尚　様	桑原	傘寿	五十崎和子　様	さくら
傘寿	竹田敏行　様	桑原	傘寿	岡田秀勝　様	みどり
傘寿	三好郁子　様	生石	傘寿	松本正子　様	みどり
傘寿	崎山明子　様	生石	傘寿	日野良二　様	福音
傘寿	中村哲三　様	道後	傘寿	二宮キヨミ　様	姫山
傘寿	山内久江　様	道後	傘寿	山本道國　様	正岡
傘寿	森　玲子　様	道後	傘寿	猪田喜代子　様	北条
傘寿	大西信也　様	湯築	傘寿	長井恵三　様	河野
傘寿	長尾弘子　様	余土	傘寿	白石淳子　様	河野
傘寿	城戸眞敏　様	伊台	傘寿	得居千春　様	河野
傘寿	井門民雄　様	久米	傘寿	玉井妍子　様	粟井

思い出の学校

うれしかった楽しかった我が校

中島　敬一（たちばな支部）

『あなたの学校は平成３年度「ＮＨＫ全国学校音楽コンクール」愛媛県コンクールにおいて審査の結果、銀賞と決定しました。ここにその栄誉をたたえ賞状を贈ります。平成３年８月１７日……』このような栄誉を赴任２年目に頂戴いたしました。前年度は県大会で入賞に至らず、大変悔しい思いをしましたが、１０年間に及ぶ「やまびこタイム」を生かした発声練習が実を結んだ訳です。地元の子どもたちへの熱き思いと先人のたゆまざる努力が、このような成果を得させたのです。ちなみに県代表の「金賞」愛大付属小は全国一になりました。小さな学校でも一致一丸やればできるとばかりに、４３名の児童が頑張りました。

また、近藤村長・森助役・三本教育長・森岡ＰＴＡ会長には、多大なご支援ご協力を頂きました。村内あげてのご支援・ご後援の賜物と感謝する次第です。

翻って、このような栄光と実績のある村立校の閉校は誠に残念としか言いようがありません。これも当世の時流に適した在り方でやむを得ないのではないでしょうか。歴代の学校運営に力した教職員はもとより、子どもたちの健全育成に全面的なご協力を頂いた保護者を始め、村民の皆様方に深甚なる敬意と感謝を捧げます。柳井川小の児童は「なせば成る」の固い信念のもとに、与えられた教育環境の中で精一杯の努力をしたものと思います。

（柳井川小学校　閉校記念誌『やまなみ』より転載）

わが心の宝石・桑原小学校

増元晶尚（桑原支部）

美しい思い出は、心を溶かすお湯（温泉）に似ている。桑原小学校の頃を振り返るとき、瞳明るく純真な子どもたち、心優しく協力的な地域の人々、緑あふれる豊かな自然環境、身も心も湯に溶けて、うっとりするように幸せな気分になる。桑原小学校の思い出は、わが生涯の宝物である。

桑原小学校では、延べ８年間お世話になった。昭和５５年からの６年間と教員生活最後の２年間、平成５、６年度である。思い出すのは、昭和５６年度、児童数２１００名、教職員数６７名、学級数５１クラスと最大規模となったことである。その年の運動会は、正に圧巻であった。南運動場が人と熱気にあふれ、子どもたちの掛け声とともにうず潮のように盛り上がる全校ダンスの迫力ある場面は、今もまぶたに焼き付いており、あの日あの頃を懐かしむ縁となっている。

昭和６０年発行の『わたしたちのくわばら』は、引き続き郷土学習の資料として利用されており、喜ばしい限りである。この冊子の作成者は、指導・監修　亀岡美鶴校長、写真　高橋　猛教諭、企画・編集　増元晶尚である。今の桑原小学校の繁栄は、歴代の校長先生はじめ、先生方のお力の賜物であろうと思う。

退職して、２０年目であるが、この冊子のお陰で現在も毎年、桑原小学校３年生の「ふるさと学習」に参加させていただき、素直な明るい子どもたちとともに楽しい一時を過ごすことができ、本当にありがたく、感謝している。これからも「ふるさと学習」が１０年、２０年と続けられるよう願っている。

桑原小学校で最も幸運だったと思うのは、校長先生との出会いである。亀岡校長先生は、教師として飛躍するきっかけをつくってくださった恩師である。校長先生は、ふんわりとしたお人柄で、いつも温かく見守ってくださった。本当に感謝の言葉をいくつ並べても足りない。

「年々歳々　花相似たり　歳々年々　人同じからず。」当たり前のことであるが、改めてその奥深さを感じる。昨年は、内外ともに波乱に満ちた年であった。新しい年が少しでも安らかで、全ての人々にとってよい年であるよう願ってやまない。桑原小学校、そして松山の教育に幸あれ。

潮見小学校

布袋節子（和気支部）

今年傘寿を迎えた。４５歳頃から潮見小学校でお世話になった。太山寺から久万川の土手をバイクで走り国道１９６号を渡る時、信号機が一つあった。

今、３０年前を振り返って忘れられないことは、校務分掌の給食会計担当になったことである。当時は教師が担当し、給食費は現金集金。６学年の６つの大きな現金袋を潮見農協へ届ける。そして牛乳、パン、副食……と毎月引き落とし支払う。毎土曜日の午後は全学年の微収額支払残高の決算をし、確かめた。各学期に久枝の栄養士の先生に台帳の指導を受けた。年度末の市の監査に合格すると肩の荷が下りた。そろばんや大きな電卓を使用した。数年後、学校にパソコンが一台導入された。縦横の集計のキーは、指一打でOK。何回も確かめはゼロ。想い起こすと昭和の夢物語だ。

二つ目はOBになってからの趣味の原点が潮見小にある。ある年のクラブ活動がお習字。PTA活動の書道教室の担当。先輩の先生にその月のお手本を書いていただき、そのお手本が３５年も続いた。次は教職員の中に俳句をしている人が２、３人いた。ある日校務員室で「俳句せんかな。」と勧められた。今もちっとも上達しないけれど、約３０年近く毎月投句を続けている。

最後に思い出すことは、朝早く出勤するとある先生が、何ともいえないとってもおいしい緑茶を入れてくれたことである。「茶葉をけちったらいかんぞな……。」と自前のお茶を常滑焼きの平急須で入れてくれた。お茶の香り、温度、濃さ、色、入れ方は手慣れたもの。喉が渇くと計量カップで水を飲んで出勤する自分にとって、その先生の入れる緑茶は脳味噌が活性化するように感じた。今考えるとその先生のお茶が飲みたくて早く出勤していたのかもしれない。その先生は潮見小学校を最後に退職された。OBとなりお茶を確かめてみたが先生のような美味しいお茶に出合うことはなかった。いろいろな出逢いがあり勉強させていただき、楽しく思い出の多い潮見小学校であった。

港南中学校の思い出

西川祥子（荏原支部）

高知県から誰も知らない愛媛県へ来て、もうすぐ５８年が経ち、とうとう「傘寿」を迎えました。大洲市・長浜町の中学校から伊予市港南中学校まで１６年、子どもは３人となりました。

新採からずっと部活動はバレーボールでしたが、港南中学校ではバスケットボールを見るようになりました。勝たせるための方策を生徒と一緒に考え「若さとは挑戦」を合言葉に、体力をつけるために母親に献立を頼んだりしました。学校が統合して、通学バスで唐川・北山崎・南山崎方面からは７時前には登校するので、年中、朝練ができました。放課後は（たくさんの部があるので）体育館は使えない日が多いため、谷上山まで往復走り、他の部の練習が終わってから急いでオールコートを使い、速攻の練習をさせてもらうのです。さあ帰宅！！　通学バスはもうない！　さあお乗りや……。

こんな毎日で明け暮れました。土･日は他校と練習試合です。時々高校へ行って私が習うのです。試験の日とお正月１日だけ練習を休みました。夫や子ども３人が、よく協力してくれました。

新人大会、やっと県優勝、夏の大会も県優勝、四国大会も優勝して全国大会でした。全国大会では、第一試合に埼玉県の上尾中学と組み、１ゴール差で負けました。上尾中学校は全国優勝しました。残念‼　港南中学校の生徒達は「全国大会が終わったら、バスケットやめる。」と言っていたのに、負けたとたん、高校ではバスケットをやろうや‼と言いだしたのです。それぞれの学校で、バスケットを頑張りました。卒業式には、夫の撮った一人一人の試合中の写真（全紙のパネル）を記念に渡しました。皆それぞれ立派な人生を送っているようです。時々バスケット部の同窓会を計画して近況を話し合うのです。今考えてみますと、中学校教員３９年間、夢中で過ぎました。港南中学校は「出戻り」もありまして、大変お世話になりました。

『えひめ教育の日』記念事業
〈まつやま教育フォーラム26〉講演会

ナザ　―大地から来た少年―

H26．11．8（土）　文教会館にて

講師：坊っちゃん劇場アウトリーチ事業部

小中学校向けキャリア教育支援劇とワークショップを開催。愛媛県生涯学習センターでミュージカルスクールを開講、学校、病院福祉施設、公民館等にアウトリーチし（飛び出し）、活動中。

出演：坊っちゃん劇場役者３名
　　キッズミュージカル出演の小中学生５名

〈STORY〉

自分の進路に迷っている愛媛の中学生たちのもとに、アフリカから期間滞在でやってきた少年ナザ。「この水は誰が汲んでくるの？」蛇口から出る水に感嘆する。貧困にあえぐナザの国では水汲みは子供の仕事だと言う。「みんながしている仕事は何？」「ご飯はどこでもらうの？」

問い掛けられた中学生は戸惑うが、次第に生活環境を学びながら交流を深める。「みんなの夢は？」と聞かれ、公務員、美容師、獣医、ゲームプログラマー……。「それって、仕事が夢？お金持ちになりたいの？夢のために仕事をするの？仕事って何？」

「ナザの国では？」「干ばつ、内戦、人殺し……。家族も亡くした。日本で学んで、国のため、生まれてくる子のために働きたい！」「協力する！！私にできることは何だろう？」それぞれが未来に向けて大きな夢を抱く。ナザはアフリカに帰っていく。

再開を待つ中学生のもとに、ナザが内戦で怪我をしたとの知らせ。「なぜ？頑張っているのにどうしてそうなるの？」「もう一度ナザと会う日を楽しみに頑張ろう。」子供たちはそれぞれの人生を描き始める。

♪～みんなが笑える未来がきっと来る～♪

出演のキッズにインタビュー

○　最初は緊張！でも、演じていると楽しくなった。拍手や笑顔で共感し合うのが好き。
○　ナザは日本人ではないけれど、同じ所や同じ関心事がある。そう思った。
○　最初は練習が嫌なときもあったけれど、適切な指導をしていただいてできるようになった。できると楽しくなって、声を掛け合って自主練習もした。
○　これからも、歌やダンスを続けたい。
○　これで、私のミュージカルは終わり。たくさんの宝ができた。

参加者の声

○　感動をありがとう。思わず涙ぐんでしまいました。自分にできること、生きること、心をつなぐこと、平和な日本、そして、演じ切る子どもの全身を使った表現力、まさに、活動型のキャリア教育で、未来を心強く思いました。
○　明るく率直なナザを始め中学生たちの外連味（けれんみ）のない演技は躍動感に満ち、職業観や人生観などの難しい主題をさわやかに表現していました。楽しい歌と踊りに私も自然と笑顔になり、思わず手拍子を打っており、会場全体が温かく和やかな雰囲気に包まれました。
○　「心で感じて　心で泣いて　相手に見せる。」まさに心に響くミュージカルでした。「なぜ」と問う少年への答えを探すうち、自分にできることを考え始める子どもたち。力強い優しさとともに、未来が来ることの明るさを感じさせてくれました。歌も台詞も見事だからでしょうか、訴えてくる内容が心にしみました。
○　キッズミュージカル出演の小中学生をみて、愛媛の子どもたちもなかなかいいなあと感じた時間でした。

観劇後は、ワークショップで声出しにも挑戦！

坊っちゃん劇場の方が、顔や口の緊張をほぐし、はきはきとした発声の指導をしてくださり、教壇に立つ者として大変参考になりました。日常生活でも活用できる表現の工夫や相手の目を見て話すことの大切さを改めて実感したひとときでした。

顔をぎゅっと縮めたりぱっと開いたり、上を向いたり下を向いたり、見つめ合ったり･･･。自分の表情の硬いことに唖然としながらも、思いっきり声を出すとすっきりしました。観劇に加え、ワークショップも楽しみました。

ブロック紹介

松山市南部児童センターを訪問して

第７ブロック理事　　藤岡　敬二

第７ブロックは、坂本・荏原・浮穴・石井東・石井・石井北・椿の７つの小学校区から成っています。松山市の南部に位置し、その中を重信川が東西に流れ、平行して松山道が走っています。その昔、この地域を森松まで伊予鉄の線路が延びていました。その名残が森松の伊予鉄営業所に残っています。線路が残っていれば、この地域はどうなっていたか思いをめぐらせます。

それでは、今年度のブロック研修会の様子をお知らせします。平成２６年１０月２３日（木）。前日の土砂降りの雨とは打って変わって、秋晴れのすばらしい天気となりました。午前９時３０分、２３名の会員が集まり、平成２６年度の第７ブロック研修会が始まりました。はなみずきセンターは、１階が保健センター、２階に南部児童センター、屋上が緑化スペースになっています。会員は１階の集団検診室で簡単な自己紹介をした後、施設長さんから南部児童センターについての説明を聞きました。児童センターは、０～１８歳未満の子どもとその保護者を対象とした福祉施設で、児童の健全育成を目的としています。南部児童センターの職員の方々は、利用者の要望などに耳を傾け、熱心に取り組んで大きな成果をあげ、全国でもトップレベルの来館者数を誇る施設を創りあげています。説明の後は、南部児童センター内と屋上の見学。午前１０時３０分という時間帯ですが、かなり多くの幼児と保護者が集まっていました。その後、近くのカフェに移動し、親睦を深めて研修会を終えました。

第７ブロックも他のブロック同様に、研修会や懇談会を開催しても会員が集まりにく状況にありますが、会員の誰もが楽しく、気軽に、普段着で参加できる活動をみんなで考えることが大切だと思います。他のブロックの活動も参考にしながら、一歩一歩実践していきたいと思います。

活動の様子

戦国ロマンの島「能島」へ

第９ブロック理事　　横田　勇三

小学校７校、中学校２校の計９校からなる松山市教育会北条ブロックは、毎年秋に、一日研修旅行を実施しています。参加人数が２０人を切ったら中止にしようという声のあるなか、今年も２１人の参加者が秋晴れのしまなみ海道を渡り、吉海町のバラ園、宮窪町の村上水軍博物館・能島（本屋大賞で話題になった「村上海賊の娘」の島）、大三島町の大山祇神社に行って来ました。

「お久しぶりです。お元気でしたか。」の挨拶を皮切りに、ＯＢ会員１０人、現職会員１０人、現職ＯＢ会員（北条ブロックを離れた後も、声を掛けるのが北条流？）１人の計２１人のメンバーが、バスに乗り込み、名所旧跡を巡り、おいしいものを食べ、土産を買い求める様は、まるで修学旅行か同窓会のよう。来年も研修旅行で再会することを約束し、笑いの絶えない１日が終わりました。

そのほかにも、春の「ブロック総会・懇親会」、夏の「楽しいクッキング」、秋の「グランドゴルフ大会」など様々な活動を行っています。こうした活動を通してＯＢ会員と現職会員が親和を図り、絆を深めることで、北条ブロックの教育の進展を図っていきたいと思います。

大山祇神社にて